

ナンバの 岩 いわ

まいにち ゆうがた ななさい だいそうげん み お いわ
毎日 夕方になると、7歳になるナンバは、大草原を見下ろす岩の
うえ く みぎて うえ うえ うえ うえ うえ うえ うえ うえ
上に来る。右手にはジャングルが、目の前と左手には、見渡す限り
だいそうげん ひろ
大草原が広がっていた。

ナンバは、はるか した ほう み や せいどうぶつ だい す
下の方に 見える 野生動物を ながめるのが 大好き
だった。今日は、ぞう むれが くさ た め まえ ひだりて みわた かぎ
象の 群れが 草を 食べている。一頭の 小象は 母象の
はな あそ ぞう みみ おお
鼻と じゃれて 遊んでいた。象の 耳は、まるで 大きな うちわのように
ゆれながら、ゆっくりだが 堂々と すす ぎょたい
進む 巨体を あおいでいた。

ゆうぐ どき だいす じかん おお きんいろ たいよう
夕暮れ時は、ナンバの 大好きな 時間だ。大きな 金色の 太陽が
ちへいせん む はじ そら えいこう み いろ はな はじ
地平線の 向こうに しずみ始め、空が 栄光に 満ちた 色を 放ち始めると、
ナンバの むね ことば い ころぶん み
胸は、言葉では 言いつくせない 興奮で 満たされる。

ひ くもひと かいせい うつく きんいろ かがや
その日は、雲一つない 快晴だった。美しい 金色の 輝きが
そら ひろ ま なか たいよう め み ひと
空いっぱい に 広がり、その真ん中に、太陽が 目に見えない 糸で
ぶらさがっているかのようだ。あざやかに ひかり はな かん きゅうたい
光を 放つ、完ぺきな 球体。
それが ちへいせん む がわ ようす ちきゅう
地平線の 向こう側に しずんでいく 様子は、まるで 地球に
の 飲みこまれていくようだ。

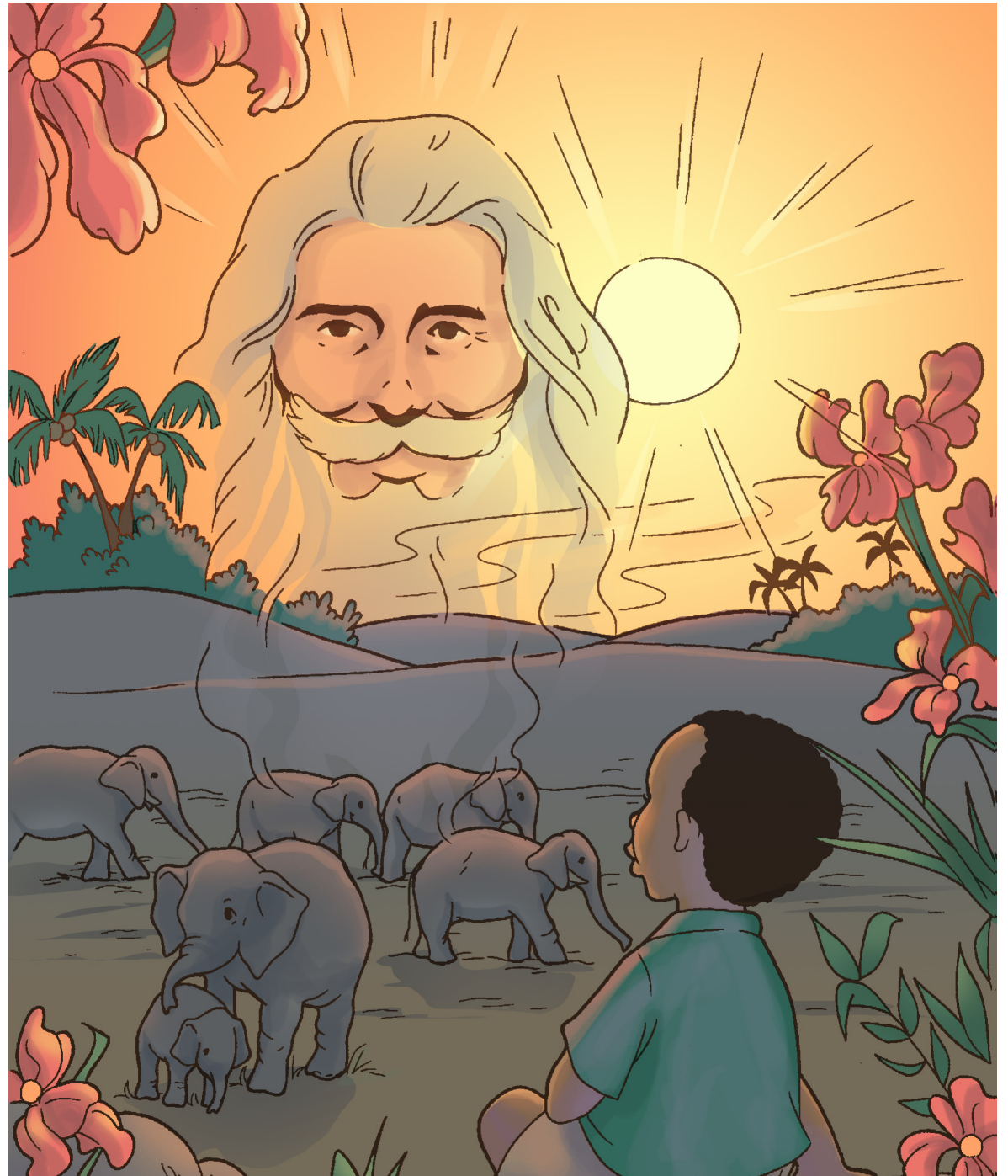


なんど 見^みに 来て^きも、日没^{にちぼつ}は ナンバ^{なんば}にとって、いつも 特別^{とくべつ} だった。空^{そら}に 広がる^{ひろ} すばらしい 色^{いろ}を ながめ、大草原^{だいそうげん}が 静けさ^{しずけさ}に 包まれる^{つつ}の^つを 見ると、神^{かみ}への 愛^{あい}を いっぱいに 感じる。この 瞬間^{しゆんかん}には、動物^{どうぶつ}さえもが 偉大^{いだい}な 創造主^{そうぞうぬし}である 神^{かみ}に 敬意^{けい}を はらって、おしゃべりを やめるかのようだ。

しずかに すわっていると、今^{いま}にも 創造主^{そうぞうぬし}が 自分^{じぶん}に 語り かける 声^{こえ}が 聞こえてきそうな 気^きが する。ナンバは、 夕方^{ゆうがた}の 新鮮^{しんせん}な 空気^{くうき}を 胸^{むね}いっぱい に すいこんだ。その 瞬間^{しゆんかん}、ナンバは 偉大^{いだい}なる 創造主^{そうぞうぬし}に 語りかけたいという おも 思い^{おも}に かられた。

きんいろ たいよう ちへいせん む 向^むこうに 消え去^きって 空^{そら}が ピンクになり、そして 紫^{むらさきいろ}色^{いろ}に 変わると、ナンバは 大草原^{だいそうげん}に 向^むかって 声^{こえ}を 上^あげた。「神様^{かみさま}、そこにおられるのですか？ あなたは どなたですか？」

すると、とても おどろいた ことには、声^{こえ}が 返^{かえ}って きたのだ。それは、まるで 風^{かぜ}の 音^{おと}のように 静^{しず}かな 声^{こえ}だった。「そう、わたしは ここにいるよ。わたしが、 偉大^{いだい}なる 宇宙^{うちゅう}の 創造主^{そうぞうぬし}だ。わたしは 太陽^{たいよう}を 造^{つく}り、月^{つき}を 造^{つく}り、星^{ほし}を 造^{つく}った。すべての 植物^{しょくぶつ}と 動物^{どうぶつ}、それに、君^{きみ}も 造^{つく}ったんだよ。君^{きみ}を 愛^{あい}している。そして、気^きづかっ ているよ！ 君^{きみ}を 見守^{みまも}っているからね。もし 立^たち止^どまって 耳^{みみ}を かたむけるなら、わたしは いつでも 君^{きみ}に 話^{はな}しかける からね。」



ナンバの^{しんぞう}心臓は^{こうふん}興奮で^{たかな}高鳴った。^{いだい}偉大な^{そうぞうぬし}創造主が
自分^{じぶん}に^{はな}話しかけてくれるなんて、^{ゆめ}夢にも^{おも}思っ
ていなかった。ナンバは^{ほほえんだ}ほほえんだ。とても^{あい}愛されて
いるように^{かん}感じた。^{かみさま}「神様、あなたが^{くださった}くださった
すべての^{もの}おくり物を^{かんしゃ}感謝します。^{たいよう}太陽と^{つき}月と^{ほし}星を
^{かんしゃ}感謝します。」

^{うえ}上を見^あ上げると、^{たいよう}太陽が^{しずんだ}しずんだ^{あと}後の^{そら}空には、
^{いちばんぼし}一番星が^{かがや}キラキラと輝いている。

^{だいそうげん}「大草原を^{かんしゃ}感謝します。^{かんしゃ}ジャングルも^{かんしゃ}感謝します。
^{どうぶつ}動物たちや^{すずしい}すずしい^{かぜ}そよ風を^{かんしゃ}感謝します。それから、
ぼくを^{つく}造って^{くださった}くださった^{こと}ことも、^{かんしゃ}感謝します！」

ナンバは^た立ち上^あがって、^{あし}足を^{のばした}のばした。^{じかんいじょう}1時間以上も
じっと^{すわって}すわっていたのに、^{すばらしい}すばらしい^{じかん}時間は^{あっと}あっと
いう^ま間に^{すぎ}過ぎ去^さったかのように^{かん}感じられた。

^{いえ}家へ^{かえ}帰^{まえ}る^{まいちど}前に、ナンバは^{だいてい}今一度、^{だいそうげん}大草原の^{ほう}方に
ふり返^{かえ}って^{かみ}神に^{ささやいた}ささやいた。「すわってあなたの
^{そうぞうぶつ}創造物を^{ながめ}ながめ、あなたに^{はな}話しかけられる^{この}この^{いわ}岩も、
^{かんしゃ}感謝します。じゃあ、また^{あした}明日！」

そう^{ささやくと}ささやくと、ナンバは^{かぞく}家族といっしょに
^{ゆうしょく}夕食を^た食べるため、^{いえ}家^むに向^{いちもくさん}かって^{はし}一目散に^{はし}走った。

